

## 子どもとメディアの関係に関する実践的研究

A practical study on the relation of Children and Media

井上豊久

Inoue Toyohisa

福祉社会教育講座

(平成20年9月30日受理)

### はじめに

絵, 象形文字, 活字, ラジオ, テレビ, ビデオ, ゲーム, インターネット, そしてケータイへと人と人, 人と「モノ」をつなぐ媒介としてのメディアは肥大化を続けている。テレビ, ゲーム, インターネット, ケータイなどの電子映像メディアに関しては若年層ほど知っていることが多くなっている。ケータイに代表されるように年代が逆転した学習・能力状況が電子映像メディアほど生じているのは人類史上, 希有であろう。しかし, 社会はこの希有な状況の真実に気づいているのだろうか。メディアの問題性に関して, 地域社会, そして学界は, 無関心, 無理解で良いのだろうか。気づいて, 何もしなくても良いのだろうか。

2000年から子どものよりよい成長・発達のためにメディアの問題性を研究し, 成果を提示し続けてきた。しかし, 社会の反応はあまりにももどかしい。

情報化が進展していく中, メディア学習は公民館などでもIT教育とって操作や情報発信・交流の面を中心に進められ, 最近ではモラル教育も行われるようになってきている。確かにメディアは地球規模でのメディア文化を育み, 誰もが情報発信でき市民の社会参画を促進する側面もある。しかし, 電子映像メディアの問題性は子どものよりよい成長・発達と関連させて実践的・総合的に検討されることは少なく, そして, 実証的なデータや提案も稀少である。そこで, これまでの7年間の調査成果を踏まえ, さらに肥大化していくメディアに関する実践的研究を行い, 現実的提言を行う。

継続的な調査によって以下のようなことが明確となっている。

### <2000年度～2006年度 調査結果の概観>

- 子どもたちの中には乳幼児期から“メディア漬け”の状態になっている子どもがいる。
- 幼児期における影響として, 言語の発達や対人関係への重大な影響がみられる。
- メディア接触の長時間化は, 遊び時間の減少, 睡眠不足など生活リズムの乱れを招き, 心身の発達への悪影響が深刻化している。
- 小中学生の間にゲーム漬け, インターネット漬けが広がり, 深刻な影響がみられる。
- メディア接触をコントロールする取り組みを行っている学校は子どもの生活や意識によりよい変容がみられてきている。中でも自ら取り組んでいる子どもに心身へのよりよい変容がみられる。
- 幼児期のメディア接触時間コントロールは小中学生の時期の生活習慣, 共感性などに影響がみられる。
- 総メディア接触時間が短いほど, 共感性や利他意識があり, 自己肯定観が高く, 生命観について肯定的なイメージを持つ子どもが多い傾向にある。
- 子どもとメディアのよりよい関係づくりのためには, 様々な場や分野, そして団体等の統合的な取り組みが必要である。
- 早寝早起きを阻害しているのはメディアであり, ノーテレビデー, 食事中のテレビ制限などは生活リズムの向上やコミュニケーション力の改善にもつながる可能性が高い。

- 子どものメディア接触は二極化している傾向にあり、その問題状況は特にケータイなどネットメディアに関して特徴的に出るのではと考えられる。

## I. 2007年度の調査概要

### 1. 調査の目的

今回の研究は、論者が過去6回にわたって実施した子どもとメディアに関する実態調査実績をいかし、子どもの意識・生活とメディア全般及びケータイやインターネットなどのネットメディアとの関係の実態及び教師の意識を明らかにするとともに、子どもとメディアに関して3年間取り組んだ学校の経年実態を把握し、基礎資料を作成し、総合的に分析することで、子どもとメディアのよりよい関係づくりへ、今後の対応への手がかりを得ることを目的として行った。

### 2. 調査内容

- (1) 子どもの総合的な生活構造（平日・休日における家庭生活・学校生活・地域生活）
- (2) からだの発達の実態（視力、耐力など）
- (3) 心の実態（自己意識・感性・共感性・自己統制性・利他意識など）
- (4) メディア接触・活動・関係変容（家庭等におけるメディア生活の実態など）
- (5) 子どもの心身の実態とケータイやインターネットなどのネットメディアとの関係と教師の意識
- (6) メディア接触時間の制限に取り組んだ学校・子どもと取り組んでいない学校・子どもの差異と特徴、取り組んだ学校の経年実態

### 3. 調査対象

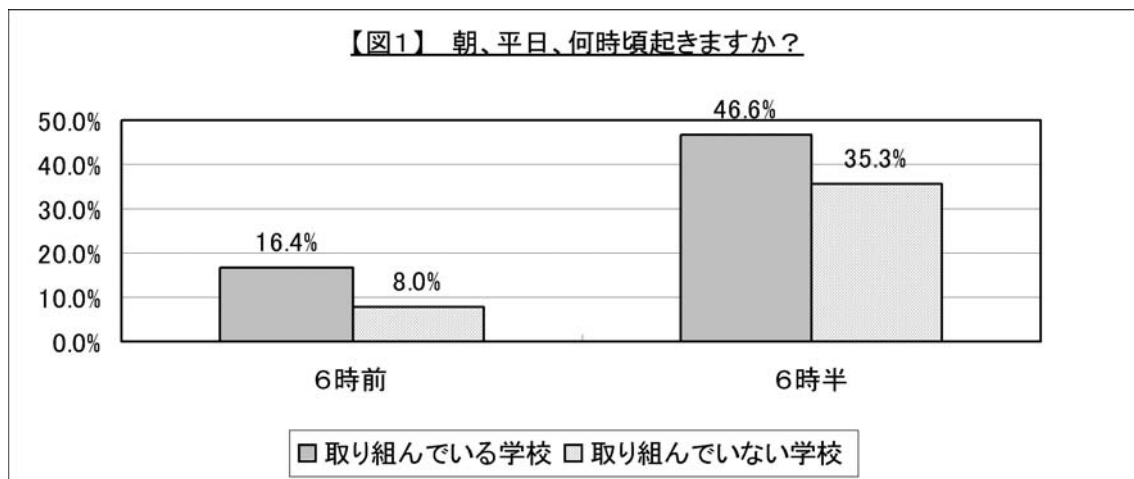
- ・質問紙調査（2007年9月から12月実施）
  - (1) サンプルング：小学生2330件，中学生3345件，合計5675（内取組842）件
  - (2) 対象（地域）：福岡県，山口県，埼玉県
- ・ヒアリング・ワークショップ調査（2007年9月から2008年2月実施）
  - (1) サンプルング：小学生31件，中学生253件，親31件，教師74件
  - (2) 対象（地域）：福岡県，島根県他

## II. 取り組み学校による成果

取り組んでいる学校(4校)では一昨年度あるいは昨年度来、児童生徒や教職員への研修、PTAからの働きかけ、チェックシート活用などによってメディア接触時間コントロールのための支援を総合的に行っている。それと同時に子どもとメディアに関する最新の情報提供や連絡誌の配布、アンケート等を行い、継続的にメディアと子どもがよりよい関係が持てるための取り組みを行っている。

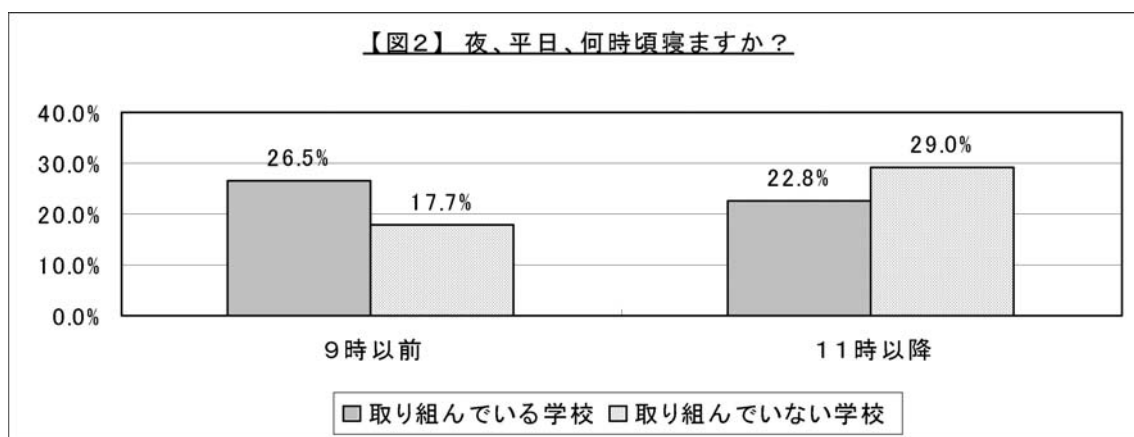
ここでは、取り組みを行っている学校と特に行っていない学校の調査結果を比較し提示する。

### (1) 起床時間の差異



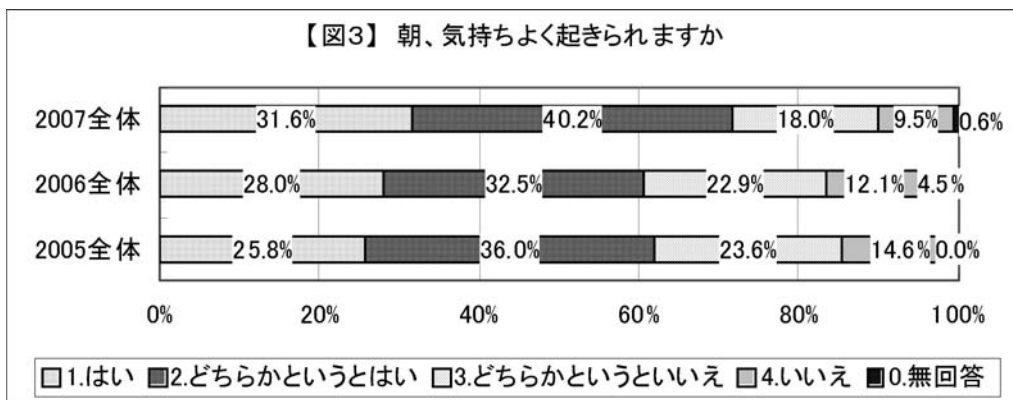
「朝、平日、何時頃起きますか」という質問に対して、早く起きている子どもの割合をみると、取り組んでいる学校では「6時前」が16.4%、取り組んでいない学校では8.0%、「6時半」がそれぞれ46.6%、35.3%で、取り組んでいる学校では早起きになっている。

### (2) 就寝時間

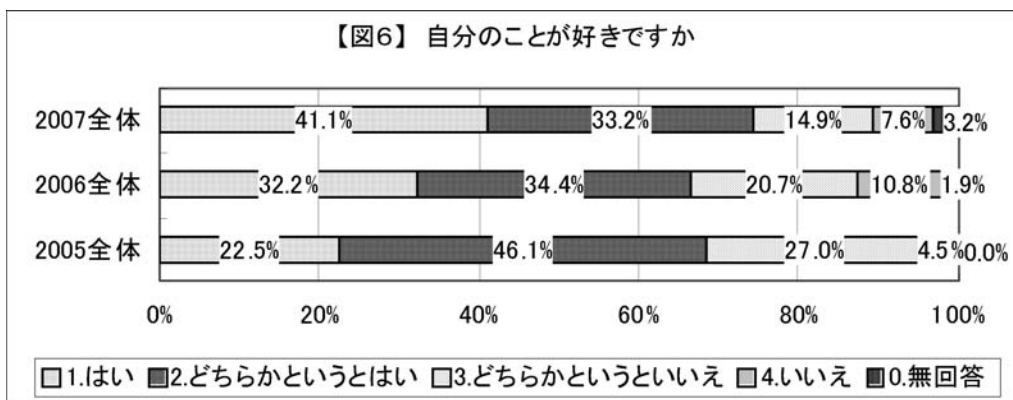
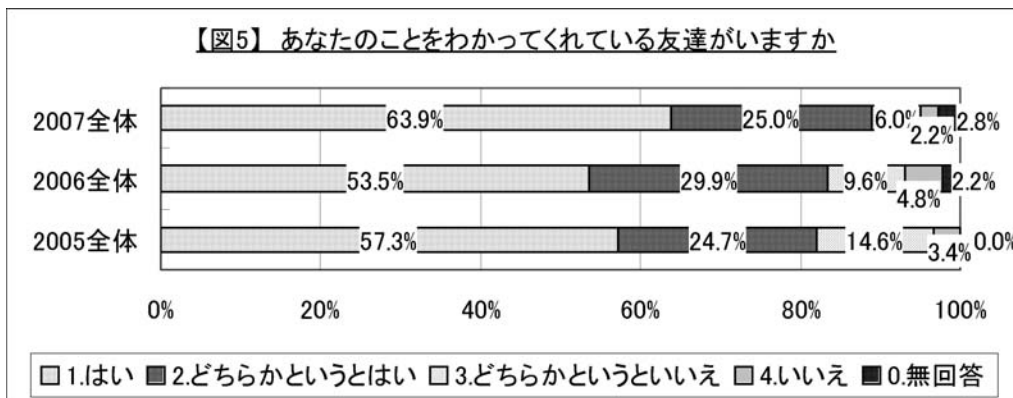
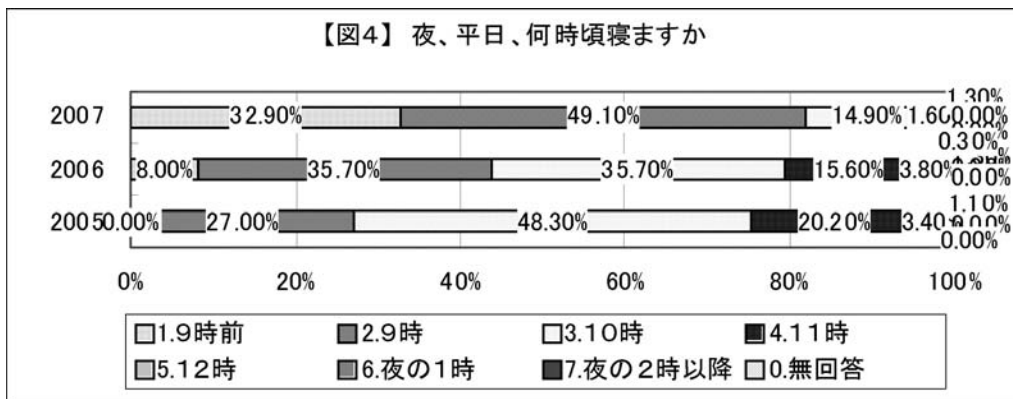


「夜、平日、何時頃寝ますか」という質問に対して取り組んでいる学校では「9時以前」が26.5%、取り組んでいない学校では17.7%、「11時以降」がそれぞれ22.8%、29.0%で、取り組んでいる学校では早寝になっている。

(3) 取り組んでいる学校の経年変化  
A 小学校「食事中のテレビ視聴」年度推移



A 小学校就寝時間推移



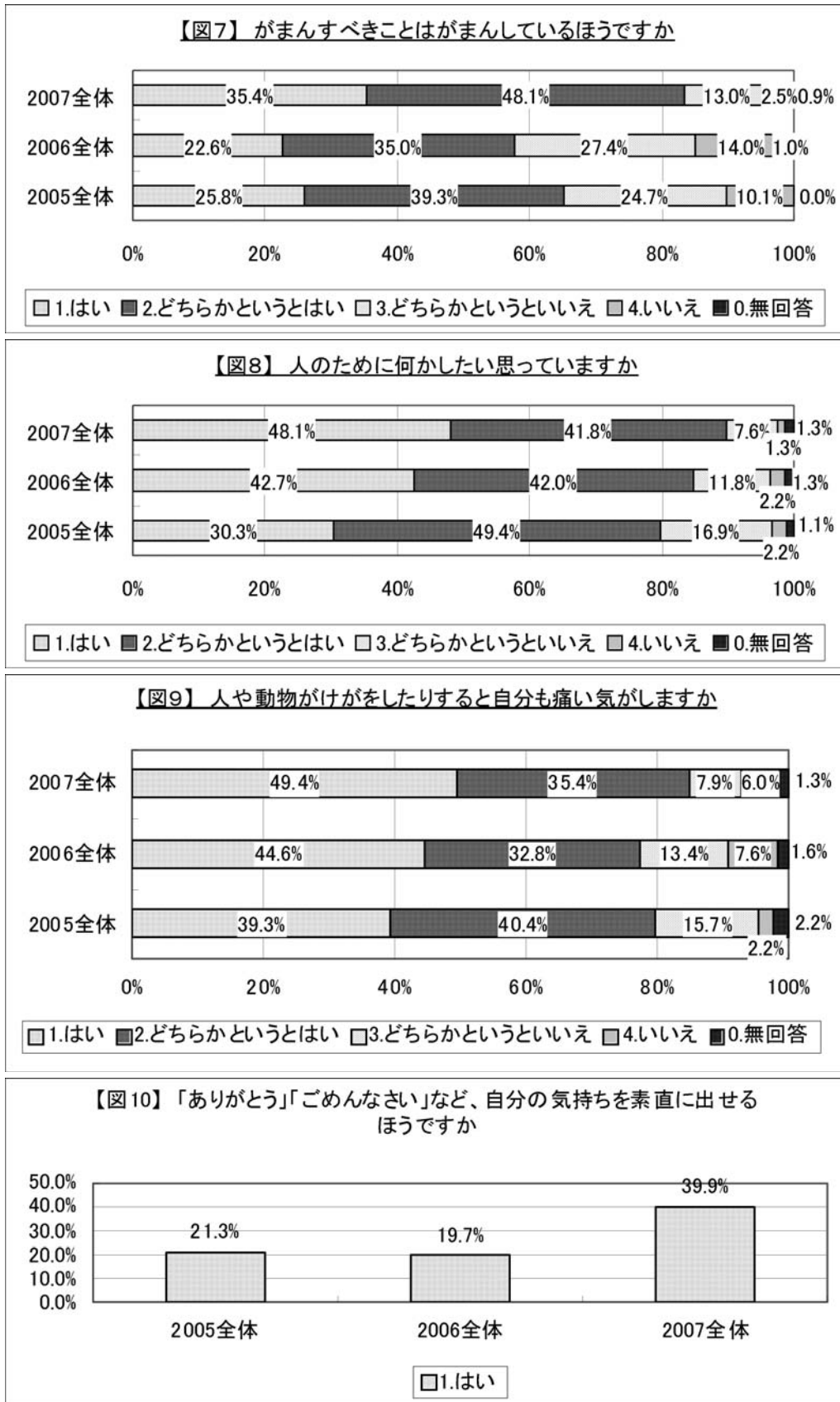


図1から10に示されているように、食事中はテレビを消したり、早寝になったりといった生活リズム、自己肯定観、人間関係、共感性、利他性など着実に取り組みの成果が出ている。



### Ⅲ. 個々人のメディア接触への取り組みの成果

取り組みをしている学校からは着実な成果が出ているが、個々の子ども実際の取り組みは知っている割に実践ができていない。しかし、取り組んでいる子どもは心身によりよい成果が出ている。ここでは「ノーテレビ（ノーメディアやアウトメディア）を知っていますか」という質問に対して「知らない（60.8%）」「知っている（23.8%）」「したことがある（9.7%）」「今もしている（4.2%, 240件）」の4段階での差異をみる。

#### (1) 気持ち良い起床

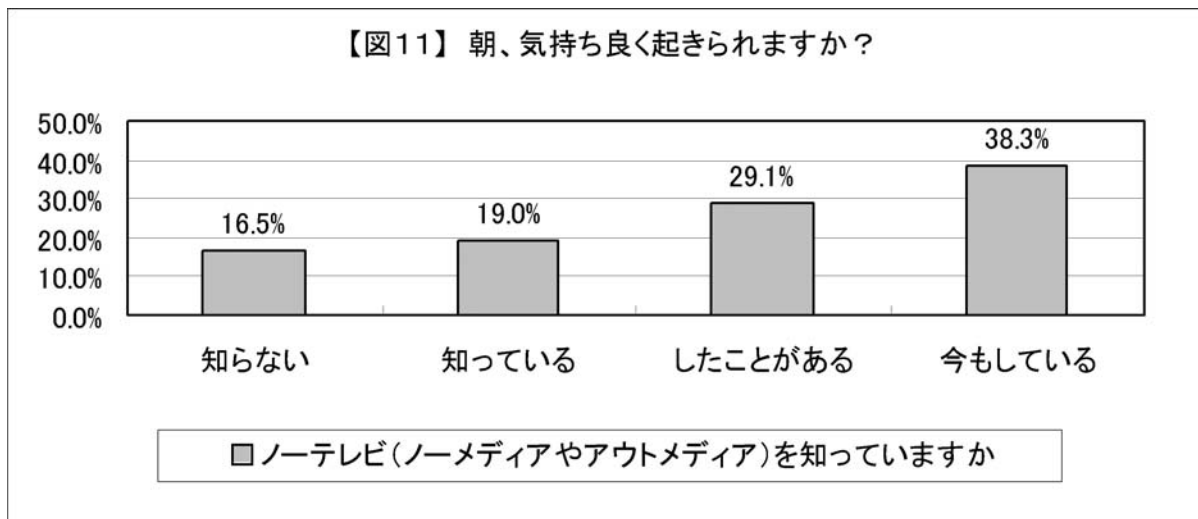


図11にみられるように「朝、気持ち良く起きられますか」という問に対して「はい」の割合は「知らない」16.5%、「知っている」19.0%、「したことがある」29.1%、「今もしている」38.3%という結果で取り組んでいる子どもほど気持ち良く起きられる割合が高い。

#### (2) 休日のメディア総接触時間

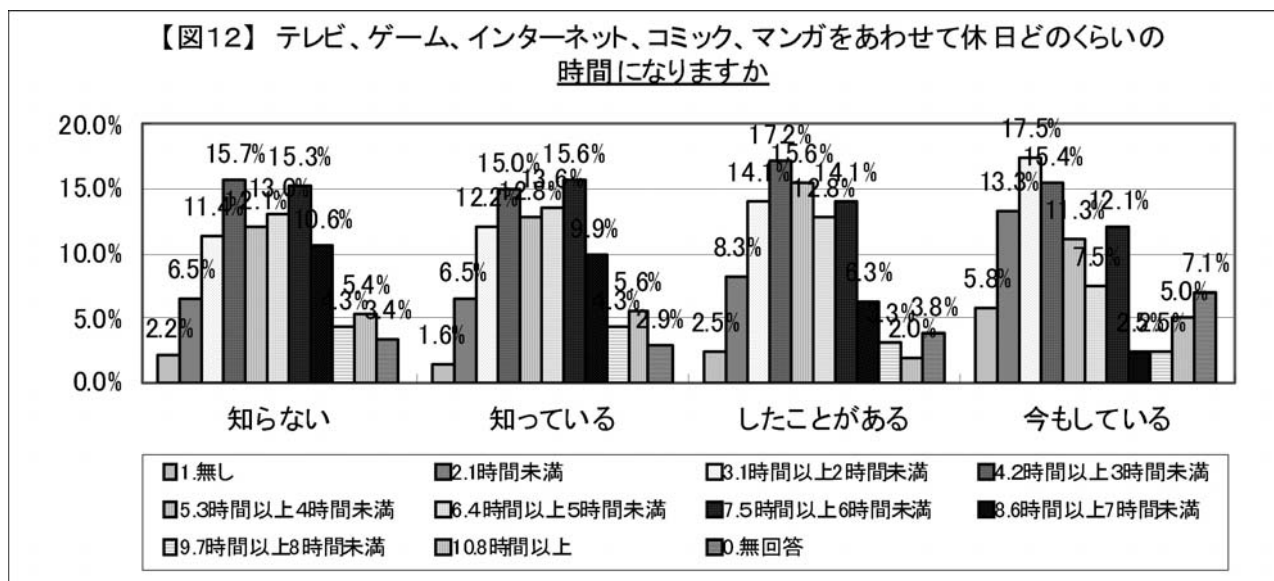
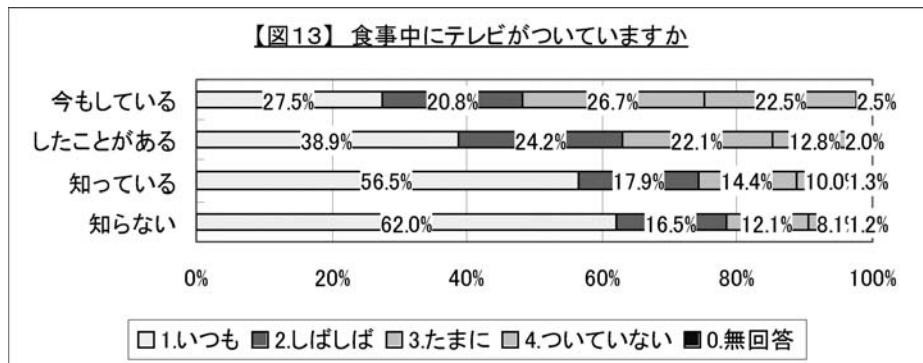


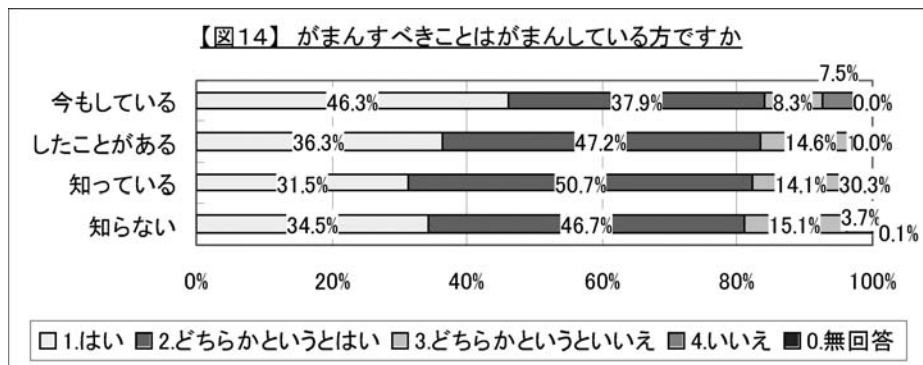
図12に示されるように、「知らない」「知っている」「したことがある」「今もしている」の4段階で休日のメディア総接触時間の割合は大きく異なる。

また、以下のように個人の取り組みの違いで大きく差が出ている。

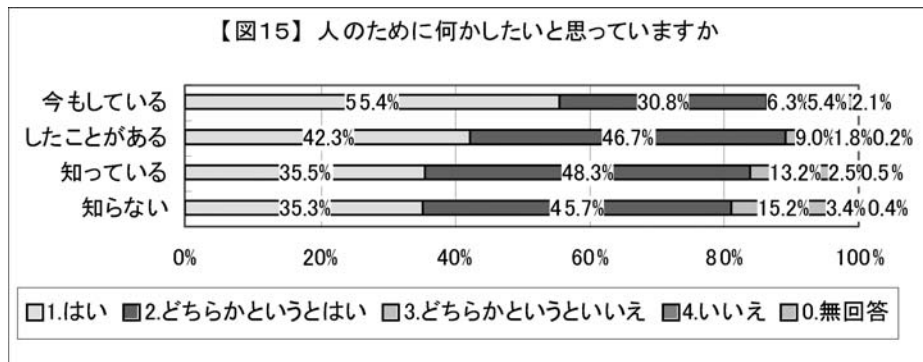
(3) 食事中のテレビ視聴



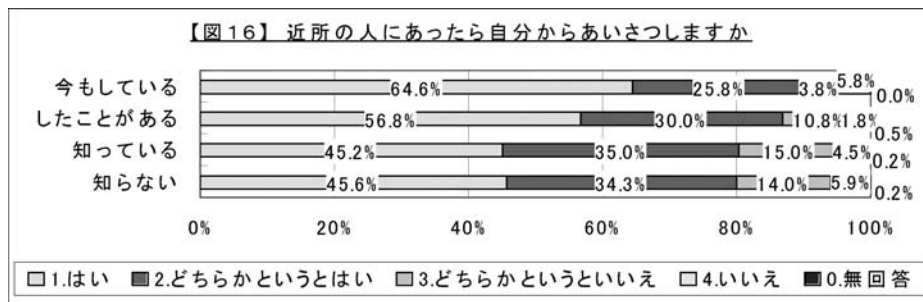
(4) 自制力



(5) 利他性



(6) 社交性



IV. ネットメディア（ケータイ）との関係

今回の調査では、インターネットやケータイなどネットメディアに関する本格的な調査を行った。残念ながら、テレビやゲームから主体的に離れる取組であるアウトメディア等の実践活動は、ケータイまでには進んでいないのが現状であった。

しかし、ケータイに対する取組の今後の緊要性はますます増大することは確かであり、先進的に研究する必要がある。

今回は、萌芽的なものとして調査結果を示す。

(1) 小中・男女別利用率

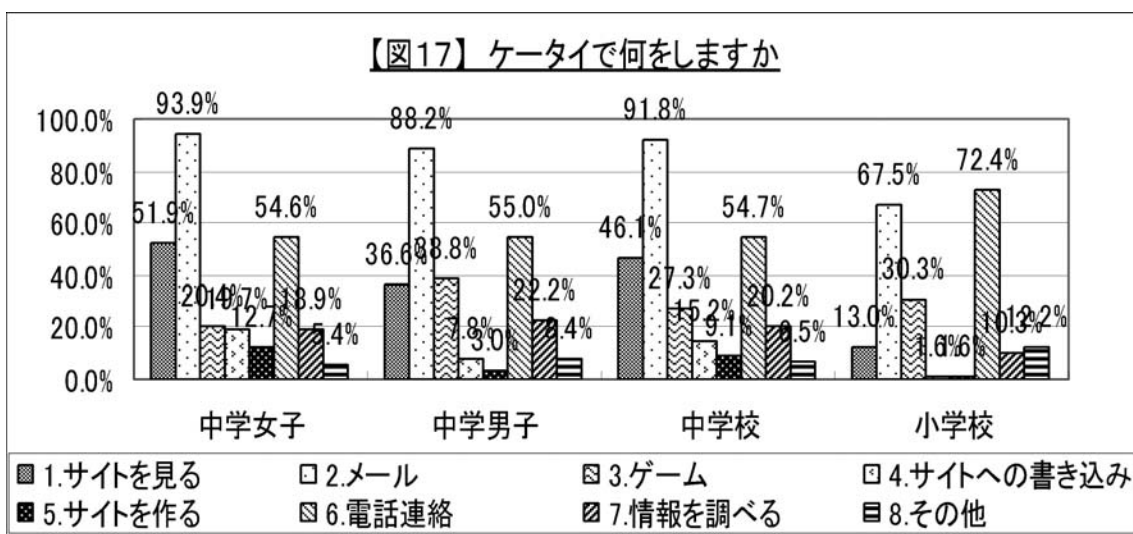
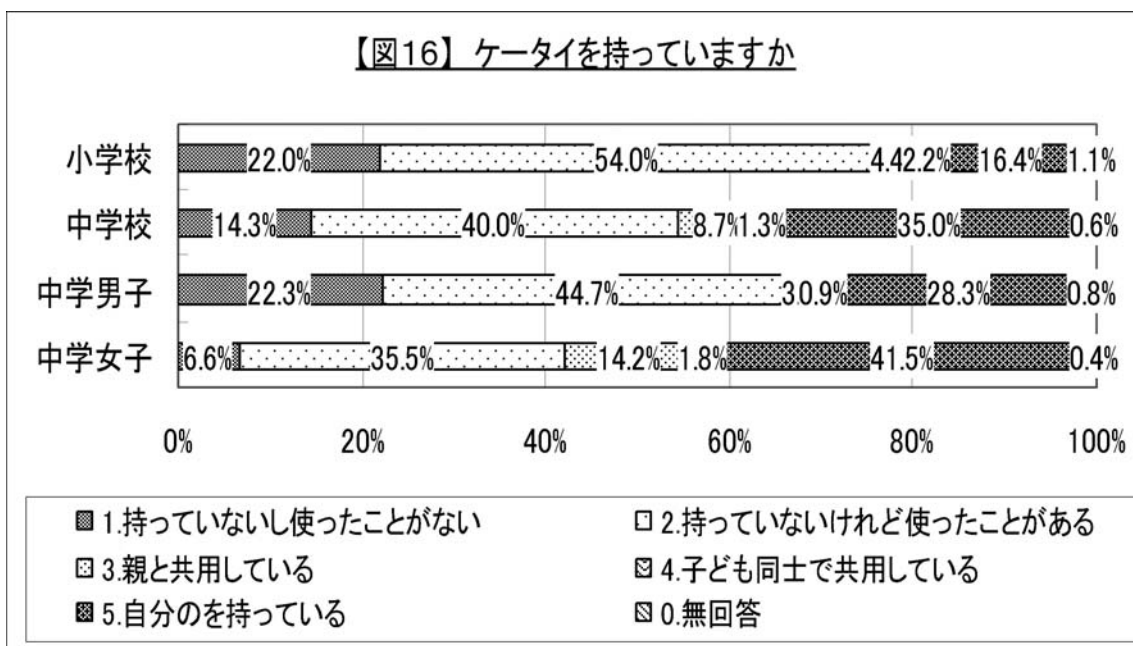
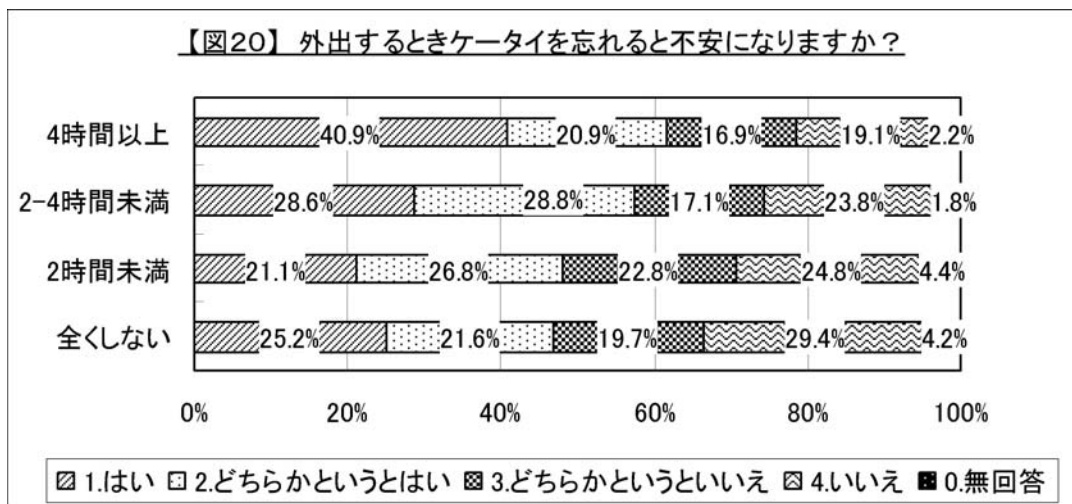
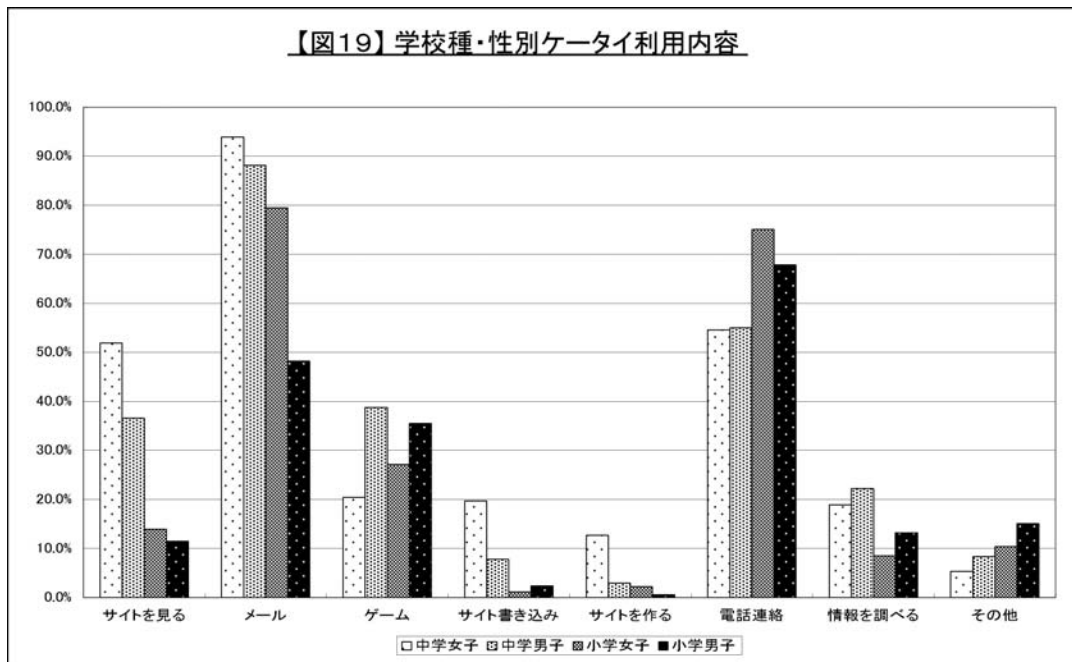
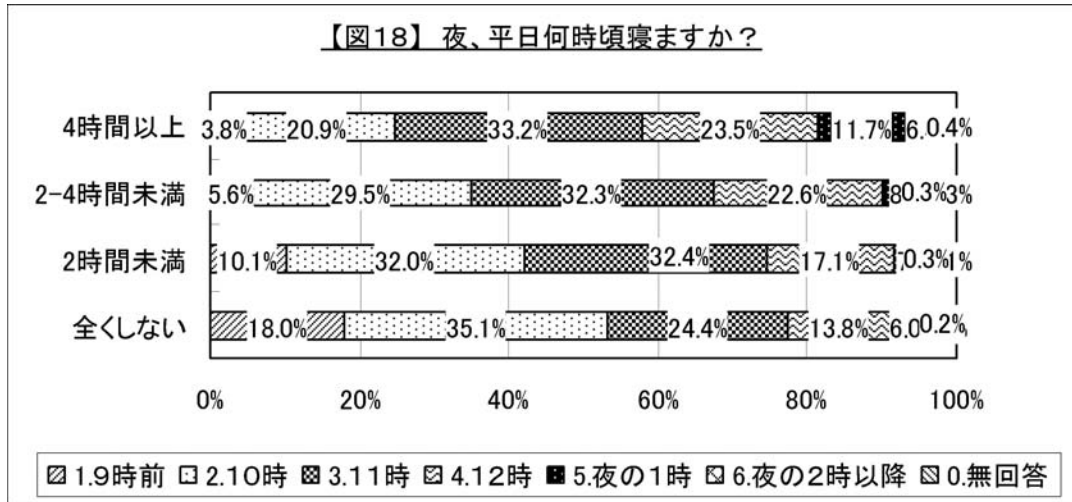
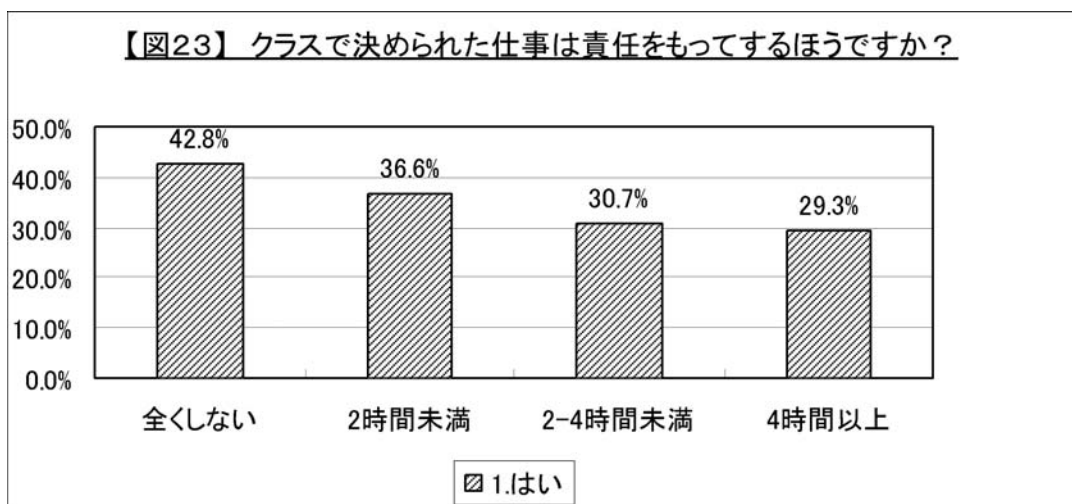
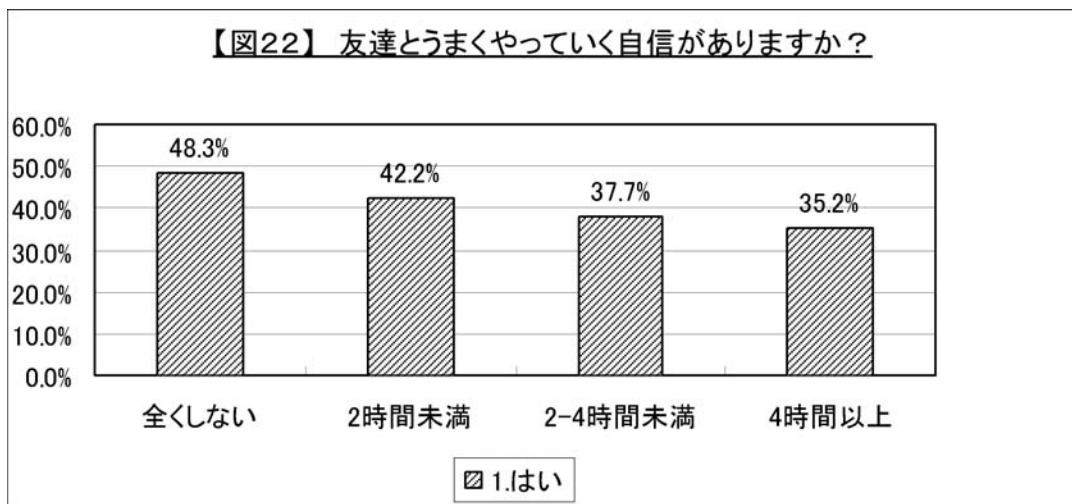
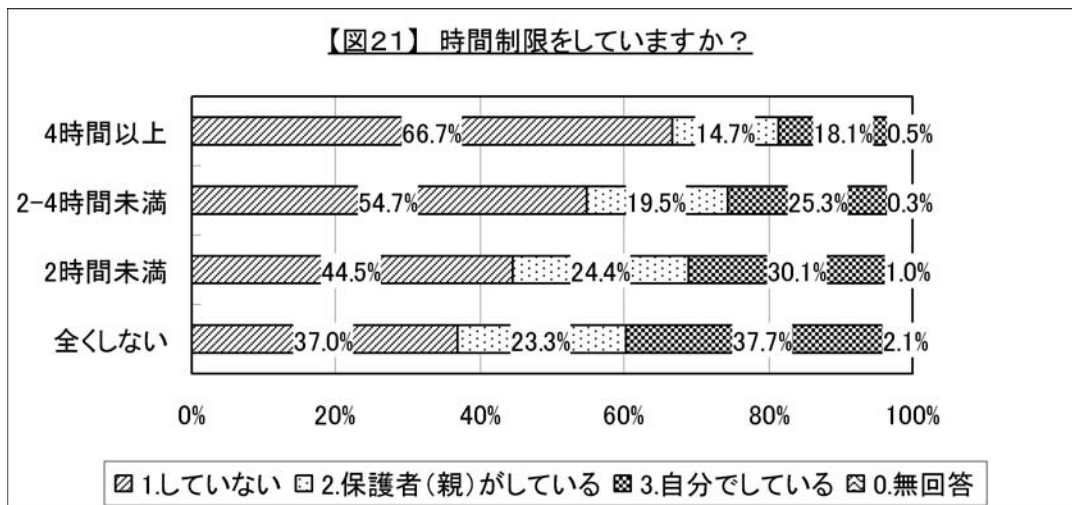


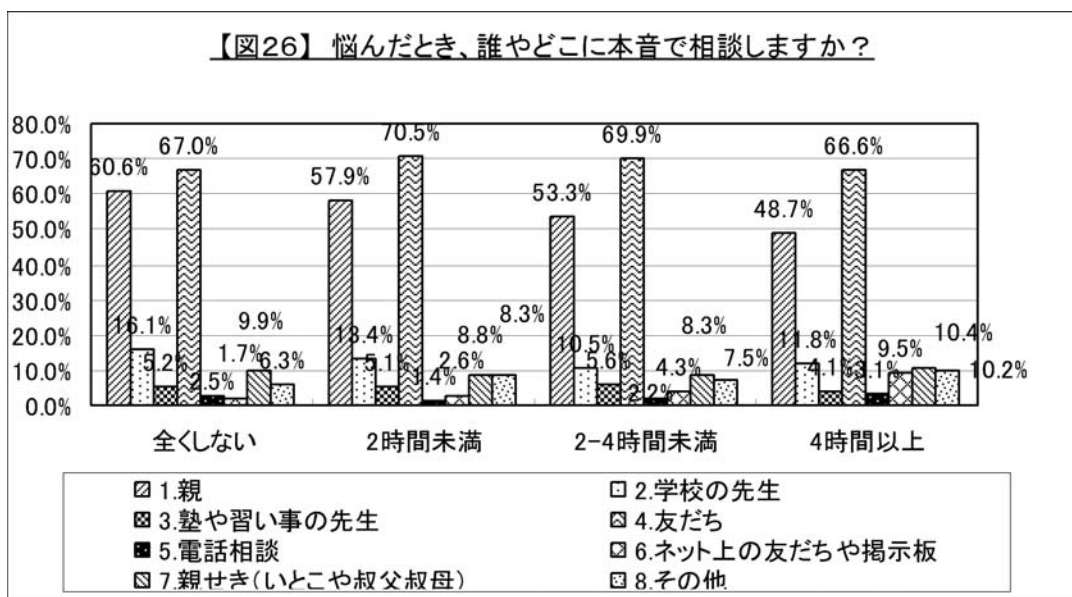
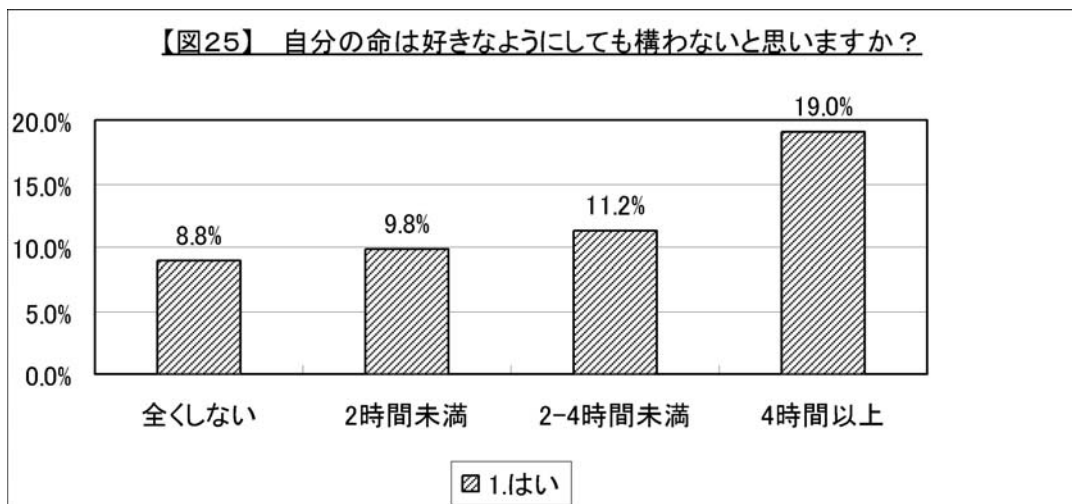
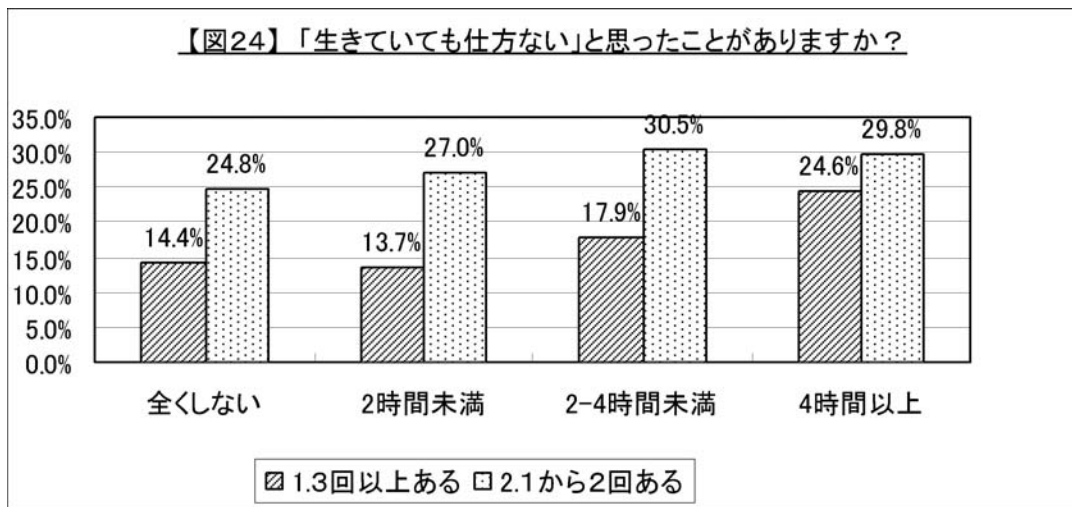
図16はケータイの所有率 図17は利用内容であり、小学生より中学生、中学生でも女子の利用割合が高く、多様な利用の割合が高いという結果である。



(2) ケータイの利用時間別







以上のように、ケータイ所有や利用には、多くの課題を抱えていることが明確となった。利用別の問題性など、さらなる詳細な研究が求められる。



## V. 子どもと先生のケータイに関する意識の共通点と差異点

子どもと先生へのヒヤリング・ワークショップにおいて「ケータイ」の良い点、悪い点、今後のあり方について調査した。その結果を簡単に示す。

### 1. 良い点

共通：いつでも、どこでも、多機能で利用できる

違い：子ども 写真を印刷できる、友達ができる、学校で言えないことやどうでもいいこと、口で言えないことが言える、パケホーダイできる

先生 緊急連絡可能、職員室に帰らなくていい、子どものほうが扱いがうまい

### 2. 悪い点

共通：相手が見えない、出会い系、有害サイト、顔が見えない、迷惑・チェーンメール、お金がかかる、いじめ、詐欺、目が悪くなる

違い：子ども 圏外がある、漢字を忘れる、悪口書かれる、文句を書かれていないか不安、ケータイ小説読むのにお金がかかる、依存性ある、かっこつけられる、クリックしただけでお金請求された、死体・武器サイトがある、勉強時間が無くなる、外で遊ばなくなる、疲れる、なまる、未成年でもアダルトサイトに入れる

先生 手紙が書けなくなる、学校裏サイト、アドレスが勝手に出回る、振り込め詐欺、中傷。

### 3. 今後のあり方

共通：フィルタリング、危ないモノには近づかない、時間を決める、

違い：子ども マナー守る、学校に持ってこない、家族で共有する、1台以上買わない、電車では静かに、メディア以外に読書など自分の趣味を

先生 ケータイ使わない、年齢制限、未成年者制限、着信拒否、購入時身分確認、指紋でアクセス、家庭内でルール決める、有害サイトなくす、学校で教育を

絵は小学生の子どもが取り組もうとして描いたものである。多様な方法が可能。



ケータイを使用している子ども・先生と、していない子ども・先生では格差がある。

先生も課題等意識しているが、ケータイ問題が肥大化している実態把握は不十分。本来のメディア・リテラシー教育は、現在の先生から主体的・具体的には全体としては出にくい。

## VI. 調査結果のまとめと提案

ここでは、メディアと生活、メディアの心身への影響、ネットメディアの実態と課題を踏まえた上で、総合的な分析と具体的な提案を行う。

### 1. 総合的分析

今回の調査研究によって、メディアが子どもの生活や心身へ影響を与えること、進展が急激なネットメディアが多くの問題を含んでいることが示された。また、そうした中で、主体的に取り組んでいる学校や地域では着実に成果を継続発展して出していることも明確となった。ここでは、これらの結果も考慮しながら、質問項目間の関連性を総合的にみるため、分析方法の一つである因子分析を行った。その結果を以下の8点にまとめる。この手法は子どもたちの回答のパターンによって回答した子どもの意識を構造的に明らかにしようとするものである。結果は今回調査された質問項目間の関連の強さを抽出し、質問の背後に潜む、共通の因子（要因）を探りだしたものである。共通の因子を構成している質問の固まり（因子行列）を基に分析を加える。因子の順番と負荷量は子どもに与える因子（要因）の強さを表し、質問項目「 」の右横の数字は因子に与えるそれぞれの質問項目の影響力の度合いを示す。この結果は主観的なものではなく、統計的に計算され、客観的に数字として析出されたものである。これまでの過去6回の調査と同様に小学校4年生から中学校3年生までを対象としている。これまでの年度の因子分析等も考え合わせながら検討する。子どもの一般的な心身の状況だけでなく、メディアについての項目が分析対象の質問項目には含まれており、メディアについても留意しながら考察する。

全体概要としては、過去の因子分析結果と比べると、2001年度の第1次調査では「自分のことが好き」といったセルフエスティーム（自尊感情）に関する因子が最も影響度の強い第一因子として析出され、2002年度の第2次調査では「すぐ疲れない」「自分で起きる」といった体力・生活リズムが、第一因子として示された。自尊感情は子どもの心身、ひいては学力にも影響を与えるということは、教育関係の文献等ではよくみられ、最近の文部科学省の答申文書等でも強調して示されてきている。そして、生活リズムも「早寝早起き朝ご飯」運動に代表されるように、子どもの心身のよりよい成長・発達にとって重要視されてきており、これまでの研究結果は子どもの心身の実態とその重要度に沿ったものであったと思われる。

しかし、昨年2006年度は家庭における多様化・二極化の影響もあってか「家庭が楽しくない」といった家庭の要因が第一因子として析出された。子どもたちを取り巻く家庭環境の実態が厳しく、特にメディアに関わって新しく出てきた多くの問題が示された。今回2007年度に、第一因子として析出されてきたものは「相手の立場に立つ」「人のために何かしたい」質問に代表されるように、人間関係、中でも主体的・社会的存在が最も重要であることが示された。直接的な社会・集団体験活動を通して育まれる力であり、社会を構成していく市民の一員としての人間になるための子どものあり方や教育が問われるものとなった。

以下、析出された全8つの因子を第1因子から第8因子まで重要な順にみていく。

#### (1) 第1因子「社会性」負荷量16.6

第一因子は「相手の立場に立つ」. 722, 「人のためになにかしたい」. 695, 「がまんすべきことはがまんしている」. 665, 「クラスで決められた仕事は責任をもってする」. 553, 「自分の気持ちが出せる」. 506, 「近所の人に自分からあいさつする」. 477, 「ともだちがいじめられていると腹が立つ」. 477, 「人や動物がけがをすると自分も痛い気がする」. 471, に関わるものが最も大切である。

特に利他性の影響が大きい。底辺には信頼性や共感性があるのではと考えられる。別の見方をすれば、電子映像メディア、中でも個人的な側面が強い、ネットメディアの対極にある内容が示されたといつてよい。こういった「おもいやり」「ひとなつっこさ」に代表される社会づくりや、人との根本的な信頼関係づくりである愛着形成に関わる直接体験（学習）活動を、子どもの自己決定性を含みながら仕組んでいくことが緊要である。

#### (2) 第2因子「自己肯定観」7.2

「自分のことが好き」. 798, 「自分にはたくさん良いところがある」. 778, 「友達とうまくやっていく自信がある」. 564 に関わる因子が2番目に示された。



特に自己肯定観を子どもが持つことが大切だが、子どもに関してはやはりこういった自尊感情に加え、友達関係が自分でつくっていけるということが影響として大きい。今回の調査結果からもこれまでの調査結果と同様、メディア接触の長時間化は自己肯定観を低下させる傾向があることが示された。メディアの時間を短くして、自己肯定観・自尊感情、人間関係づくりの能力が高まる活動、他人と共同で企画・実施し成果を共感でき、そして感謝される体験や、感謝する体験、社会や他人の役に立つ経験を含んだ体験学習に今後は意図的・計画的に取り組まれることが求められよう。

### (3) 第3因子「表現力」5.8

「たくさん人の前で言いたいことが言える」. 718, 「イヤなことははっきりノーと言える」. 662, 「人の目を見て話すのが苦手でない」. 577 といったコミュニケーション能力に関わる内容が第3位であった。

人前での表現力や自己決定的表現力が人の目をみて話すという言葉だけではなく、直接的な五感を使ってのコミュニケーションと関連があることが示された。自分の考えをもった明確な態度がとれる共感・共有を基本としたシェアリング体験の取り入れや、オリジナルな考えを大切に環境の中での主体的なコミュニケーション力の育成や、人前での開放的な機会を提供したりする体験学習が必要ではと思われる。メディアによる間接的なコミュニケーションだけではなく、「フェイス ツー フェイス」の直接のコミュニケーション体験が求められる。多人数の中での表現の体験が重要であり、ドラマづくりなど、自然な自分の思いを基に表現していく「ドラマスクール」等の取り組みが1つの好例といえよう。

### (4) 第4因子「家族・命」5.3

「家族が好き」. 674, 「自分の命だといっても自分で好きにして良いわけではない」. 589, 「親はほしがめるものをすぐには買わない」. 486, という家族と命が関連項目として示された。

家族のことがまず好きになることが基本で、共通の充実した体験、モノ制限が必要ではということが結果からは示された。家族を人生や生活でしっかりと位置づけ、家族の共通体験を大切に、楽しみ楽しめる環境づくりが、社会、地域、家庭、個々人に求められる。しかし、好きになれない家族の中にいる子どもに対しては、家族も含めた、家族支援が今後は大切であり、焦点的な複数の専門家が関わる体制が必要な場合もあろう。動物や人間の死と直接出会う機会など、命を大切に、命を深く知り、命の喜びを感じられる体験学習が求められる。

これまでの調査結果からメディア時間の短時間化、食事中のテレビ視聴の制限は、家族の愛着度を増す傾向があるということが示された。メディアから少し距離を置き、家族の時間を取り戻してはどうであろうか。

### (5) 第5因子「子どもとメディアとの関係と生活リズム」4.8

「ノーテレビ運動にかかわる」. 638, 「食事中にテレビがついていない」. 598, 「自分のことをわかってくれる友達がいる」. 404, 「朝、気持ち良く起きられる」. 375, といったメディアと生活リズムの関連性が明確に示された。メディアとの主体的な関係づくりは、人とのかかわりのきっかけや生活リズムの向上にもつながる可能性がある。これまでの、調査結果からも「早寝早起き朝ご飯」に最も効果的な手段の一つがメディア接触時間の主体的な制限である。メディアに関して、問題を問題と感じる感性の鋭敏化、メディア・リテラシーの認知面・実践面での力量形成が求められる。その時に、重要であるのは、これまでの調査結果からも、メディアの提供側の体験である。メディアが構成するものであるという実感や実地体験、そしていかに批判的に読み解くことが必要か、ということをも身をもって知ることや、実践的な力量形成が現代社会では不可欠となってきているのである。

### (6) 第6因子「低体力」4.6

6番目は「右と左で左右の視力差がある」. 651, 「長時間立っているときつい」. 551, といった体や体力に関するものであった。

(立体)視力、粘る体力は関連しており、視力の低下を招く傾向にあるメディアの長時間視聴には注意が必要であり、体力低下だけではなく、消極的な活動ともつながる可能性があるのではと考えられる。体力がないということが、教室で1時間、椅子にきちんと座って先生の話聞いていられないという現実を生じさせ、ひいては子どもが意欲や積極性を出しにくい、ということにつながる。メディア接触はこれまでの研究

からも視力低下をもたらすことが示されてきたが、視力など体に悪い影響を与えるだけでなく、体を動かす時間を減少させる。五感力の発達を促進するためにも、外遊びを勧め、スポーツに親しむことを推進することが求められる。例えば、福岡県宗像市の自由ヶ丘小学校で10年ほど前から行われている校庭ボランティアによる外遊びの活性化は子どもの心身のよりよい発達に効果的である。この事業は、昼休みに大学生が主として中学年のギャングエイジの子どもの遊びを見守り、一緒に楽しく遊ぶという事業である。過去の調査において家庭や地域でも外遊び時間が長時間化し、学校が楽しくなるという結果が示されている。

#### (7) 第7因子「生命観とケータイ不安」 4.3

「命は生き返ると思う」、659、「ケータイを忘れると不安になる」、639という2つの質問項目の関連が示された。現在、急激に肥大化しているケータイに支配されることと命への理解は関連があるのではという可能性が示された。ケータイ使用は友達づくりにつながる場合もあることから、コミュニケーションツールとしての有効性が今回の結果から示された。しかし、生命観に関しては危険性をかなりの割合で伴うのではということが示された。今回の調査結果から長時間のケータイ接触の子どもの中には「万能観」を有する子どもの存在がみられ、「命」の視点からケータイに関する根本的な学習の必要があることがわかった。ケータイにはまってしまった子どもたちへの、早急な対応が命の視点から必要であり、ネットメディアという、電子映像メディアの中でも、特に孤立的・個人的になりがちなケータイというメディアの特徴を明確に把握し、家庭・学校・地域でその有害性に対処することが求められる。

#### (8) 第8因子「親の注意態度」 3.9

「親が生活態度について注意する」、781は、どの項目とも強い関連はみられず、親の生活態度への注意が子どもの心身へ関わることは現在では薄いのではと考えられる。親と子ども、大人と子ども、その関係が内的な権威関係や相互の信頼関係で成り立っていない場合があることが考えられる。夜遅いメディア接触の実態は、親が子どものメディアに関する問題性に気づいていないというだけではなく、子どもに対して親が、必要な事項であっても行動が変わる形で指導できていないということが示されているのではと思われる。この第8因子は、まさにそのことを示しているのではないだろうか。家庭教育の在り方を、あるいは子育て支援のあり方を考え直す時期が来ている。親が親として、大人として、子育てができる環境作りが求められる。親や家族全体を支え、特に問題を抱えがちな家族に対して、子どもに重点的に取り組むことが重要である。

## 2. 提案

### (1) メディア総接触時間と接触時間帯への効果的な手法の導入を

メディア総接触時間をコントロールしていく実践は成果があり、その成果は子どものより良い成長・発達のために熱心に取り組めば継続・発展していることが示された。電子映像メディアが進化・肥大化していく中、メディアはメディア漬けを子どもに助長し、「モノ」消費をあおっている。しかし、継続して取り組めばそれだけの成果があり、工夫を重ねることにより、その成果は継続する可能性が高い。学校やPTA、地域での講演・研修会・実習、標語づくりや、時期を決めて「ノーテレビデー、ノーテレビウィーク」などの取り組み、ワークショップを取り入れた参画的学習の導入に加え、親や子どもが参画していくプロセスが大切である。アンケートをとるなどして、客観的な実態や成果を知らせていくことも大切である。メディア総接触時間コントロールに関して指導や支援をしていくリーダーとなる人たちが、専門家やNPO等とも連携して、実践を粘り強く充実させていくことが重要となろう。

ただし、子どもの実態、その家族のあり方は多様化、二極化している傾向があり、軽い問題性を抱える子どもから、簡単には抜け出せない厳しい問題を抱える子どもまでおり、ケース別、レベル別の取り組み・教育も必要である。メディア総接触長時間化の子どもの問題は大きく、親が無関心、子どもに適切な指導ができない、メディアとどう接しさせればよいのか理解不足などの課題があり、子どもや親自身に気づかせる機会が緊要である。福岡県福津市や春日市等で行っているように大半の親が集まる健康診断時や小学校の入学説明会の時などに学習機会を提供することが必要である。接触の実態は多様化しているため、平均時間よりも多様化した実態を正確に把握することが不可欠である。メディア、中でもケータイは「ケータイをもたないと不安である」など子どもの日常生活あるいは身体の一部と急速になりつつある。中でも、接触時間が長時間化している子どもには現実感、人権意識、人間関係、生命観等に問題性が見られる。焦点化した効果が

ある学校・地域に合った独自の取り組みが緊要である。

## (2) ケータイに対する新しい取り組みを

ネットに関する実態は急激に変化してきており、課題が多く、特にケータイに関して個人性が強いということから大きな問題が生じやすいことがわかった。子どもが隠れて使用することも可能であることなど、これまでの「ノーテレビ運動」等の取り組みそのままでは、ケータイ等ネットメディアに関しては十分に有効とはいえない状況が出てきた。前述の接触時間や接触時間帯を制限していく試みは重要である程度効果があるが、さらに、親がケータイについて学ぶこと、時間・内容・使用方法・使用料等に関して、権限と責任をしっかりと持つことや、子どもと話し合い、その上で主体的に利用していくことが求められる。

子どものインターネットやケータイのネット利用は低年齢化、拡大・多様化してきており、その普及の速度は急激である。今回のインタビュー調査結果からもメールの交換から直接、大人と出会っている子どもも実際はかなりおり、学校裏サイトや誹謗・中傷、出会い系サイト等犯罪等につながるものなど、子どもにとって非常に危険で防ぐことが困難であるという実態が存在する。

ケータイ接触ののめり込みが問題として典型的に出てきており、今後も継続的な研究が不可欠であり、対策が緊要である。特に小学生よりも中学生、そして男子よりも女子に留意が必要である。

ケータイの利用率は急速に向上、ケータイを持っていないと不安になるなど心身に問題となる影響を与えている可能性がある。また、ケータイは人間関係づくりのきっかけになることもあるようだが、より孤立・個人的な側面が強く、人間や社会と主体的に関わることを困難にするのではと思われ、緊急の対策が求められる。

## (3) 総合的、焦点的メディア・リテラシー教育を

子どもと親や教師には意識の差があり、そのことに留意した上で、メディアの本質である「構成する」という視点でのメディア・リテラシー教育が必要である。

子どもと親や教師にはメディアやケータイに関する意識に共通点と共に差異点がみられ、その魅力や中毒性などの差異点に留意した教育が必要である。メディアを批判的に読み解いていくメディア・リテラシーの力量形成のための教育が子どもにも教師にも早急に不可欠となってきている。カナダ等海外のいくつかの国で行われているように新聞作成、ビデオ作品作成、ネットコンテンツ作成など、体系的に構成力を育成する体験学習が不可欠の時代となった。NPO法人子どもとメディアでは過去「わがまち紹介」ビデオ作成を伴うメディア・リテラシーの力量形成事業で、構成側の体験学習を行い成果をあげた。

確かにケータイの利用は家庭の責任が第一義であるが、これだけ問題が噴出し、小学生からのケータイ利用が増加してきていることを考えると、家庭だけではなく、学校でも小学生の段階で取り組むことが必要であろう。全員の子どものにアクセスや情報発信・交流の教育やモラル教育、危険性を喚起する教育だけではなく、メディアは「構成する」という体験学習、接触時間や接触時間帯の自己コントロール力の育成等、メディア・リテラシー、ケータイについての時宜にあった学習機会の提供が求められる。このことは学校の先生に対するこういった教育のための研修や教材作りの必要性も示している。

ネットの日常化、身体化に対応してメディアと子どもに関して、改めて社会全体の取り組みが求められている。メディアは、子どもや親の生活態度に強く悪影響を及ぼすことがある。子どもや親だけの取り組みだけでは難しいことが多々ある。今回アンケート結果で取り組んでいる学校が含まれている山口県宇部市では教育、心理、医療、福祉などの子どもに関わる分野の人々が集まり、研修会を行っている。埼玉県蕨市の中央東小学校では、多方面の人材の協力を得、毎月、メディアコントロールに関するお便りを出し、そして個人が選択して取り組めるチェックシートを作成・活用している。どちらも子どもや親が自己決定的、主体的に取り組む方向性を基本として着実に成果がみられた。認知面、感性面、実践面など多様な面からのアプローチが成果を出すにはリーダーシップとともにコーディネートの能力が必要のようである。

子どもが主体的にメディア接触時間をコントロールできるように、ネットに関して考慮したさらなる研究が求められてきている。その上で、メディア漬けから脱出した子どもたちが、からだや心、コミュニケーションの力を豊かに発達させる場を確保するために、社会全体の取り組みが求められている。メディア接触活動を自己決定し、外遊びや活字文化、スポーツ文化、家や地域での仕事や役割を持った活動、そして社会貢献やボランティア活動の機会を充実させていくことが長い目で見ると子どものよりよい成長・発達につな

がり、そのための環境づくりが求められる。

メディアに関する活動や学習において、家庭・学校・地域の取り組みは追いついていないというのが実態である。各種の提言等だけでなく緊急に実践と研究が求められよう。

